
何でも様

グロ黒馬鹿人間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

何でも様

【Nコード】

N3421M

【作者名】

グロ黒馬鹿人間

【あらすじ】

とあるきつかけで霧島愛理夏たちは何でも様を呼び出す儀式を行うことになり……。何でも様とはいったい何者なのか!? 愛理夏たちは無事生きてここを出ることができるのか!?

〈登場人物〉（前書き）

あんまりいい作品じゃないかもしれませんがこれからよろしく願
いします。

～登場人物～

霧島愛理夏・・主人公。活発で元気100%。成績優秀でなんでもやれちゃう子。皆からも尊敬されていて困っている子を放っておけないタイプ。好奇心が旺盛。皆の人気者。18歳

芳野咲子・・・愛理夏の親友。愛理夏と違って大人しい子。いつも読書してる。本当は皆ともっと仲良くしたいと思っている。男子から結構人気。19歳

藍澤レノン（あいざわれのん）・・今月転校してきたかわいい子。オカルトマニア。怖い話とかも好き。普段はおどしてるけど都市伝説とかの話になると凄く喋る。19歳

飯沼慶治・・男子の中で一番咲子を理解してる大人しいやつ。大人しいけど誰に対しても凄くやさしいため皆のちょっとした人気者。18歳

吉崎宗忌・・活発な男子（KY）皆からの人気者。バカ。でも行動力はある。皆の人気者。19歳

藤野浩太・・・大人しい男子。病弱でたまにしか学校に来ない。女子から人気がある。でも男子はこいつが嫌い。18歳

何でも様・・・愛理夏たちに呼び出された最近広まりだした都市伝説のキャラ。幼い姿（12歳ぐらい）だがすごい残酷な子。怪しい人・・・20歳位の男性。名前も分らない怪しい人。

ゝ始まりの時ゝ（前書き）

この前は登場人物の紹介でしたね。

今回からスタートします。

今回は序章です。

ちなみに主人公視点の話は次回からです。

始まりの時

ねえ。何でも様って知ってる？最近出来た都市伝説なの。この話聞いてくれる？本当！？　ありがと。

私この話友達から聞いてその話聞き終わつたときこの話を皆に伝えたいと思つてさつきから皆に聞かそうとしてゐるのに皆私のこの話聞く前に「きゃあああああ！来ないでえええええええええええ！」て言つて走つて逃げてくんだよ。ひどくない？ん？あつごめん・・。そうだよね。さつさと話してほしいよね。あなたこういう話好きだものね・・。ごめんなさい。そうかりかりしないで聞いてよ。今話すから・・。

何でも様はその名の通り願いをひとつだけ何でも叶えてくれるの。儀式を行う時間とかは午後ならいつでもいいんだって。でも複数の人数でやらないと出てこないんだって。場所は自宅の自室か学校の図書館又は自分のクラス。一番出やすい場所は学校の図書館。召喚方法はまず蠟燭ろうそく一本と白紙を一枚と自分の血液で濡らしたものと刃物を一つどんなのでも良いから用意するの。それらを自分のやる場所の真ん中に集めてそれらを皆で囲むの。それで皆で手をつないで「何でも様何でも様どうかこの場におらっしゃってください。おらっしゃいましたら私たちの肩を右側から順に叩いていってくださいませ。」

と右側の人から順に一人ずつ言っていくの。そして肩を叩かれたら真ん中に置いておいた自分の刃物で指をちよつと切つてその血で自分の願ひ事を真ん中に置いてある自分の持つてきた白紙に自分の願ひを書くの。そうすれば何でも様はその場にいる全員の願ひを叶えてくれるの！でも途中で手順を一回でも間違つたり誰かが一回でも変な動作をしたら皆殺されちゃうんだつて。一人ひとりとっても残酷な殺し方で。でね一つおかしな点があつてその儀式をやつたヒト一人も歸つてこないんだつて……。怖いよね……。

多分みんな何でも様に気に入られちゃったんだね……。え？あつそつか。まだ説明してなかったっけ。何でも様はね寂しがり屋さんなんだよ。だから願いを叶えた後何でも様と遊ばなきゃ帰れないの。だって「願いを叶えました。はい。もう帰って良いですよ。」なんて面白みのない都市伝説ないよ？

当然何でも様も願いがある。その願いが皆と遊ぶってゆうことだから願いを叶えてくれたお礼に遊んであげるの。まあどんな遊びかは何でも様を呼び出してからのお楽しみってこと。

……。やんないほうが良いと思う。けどそれはあなたの問題じゃん。私は関係ないでしょ？……。

そう。喜んでもらえてうれしい！がんばってね……。何かあったらここに電話して。うん。

私のメアド。私何でも様に帰ってもらうやり方とか知ってるから。力になる。うん。じゃあね。

ゝ始まりの時ゝ（後書き）

今回は序章でした。

次回からは主人公視点で物語を進めます。

朝の会1 (前書き)

遅くなつてすいません・・・。
今回から主人公視点です。

朝の会 1

「ねえ！！愛理夏！聞いて聞いて」
今すごい都市伝説を仕入れて来たんだから」

と昼休みにレノンが話しかけてきた。暎子と話してる最中だった。はつきり言つてなんかその時だけレノンがうずくまったような気がした。レノンが呼んだのか周忌と浩太もいた。そしていつもの皆が集まったところでレノンが話し始めた。

「……だつてえ
W W W W W W W W W W W W W W W W

怖くね?どう?皆の感想は?」

とレノンが話を締めくくった。

男子二人は面白そうだと言った。暎子は聞いたことない・・・よくそんなの知ってんね。と言った。私が感想を述べようとしたそのとき。そこでチャイムが鳴った。するとレノンは

「あつじやあまた後で！もちろん愛理夏の席に集合ね じゃ」

と勝手にここを集合場所にしてさっさと自分の席に戻っていった。
 まった。

そばで暎子が

「どんまい。」

と言って去っていった。他の男子二人も変なまなざしを私に向けてきた。

今日是最悪な日かもしれない。

その予感はこの10時間後に的中するということをこの時の私はまだ知らない。

冗談でちよっと思っただけなのにまさか本当に最悪な日になってそしてそのときには最悪などと言う暇もなくなるほどの展開がこのあと私たちを待ちうけていたのだった・・・。

朝の会1（後書き）

今日は結構短かったけどちょっとここで終わらせてもらいます。
次回の投稿がまた遅くなるかも知れませんがそこらへんお願いします。

今回もこの小説もどきに付き合ってくれてありがとうございます。
それでは

朝の会々深夜（前書き）

ちよつと早めかな？

ついに何でも様登場です！！

朝の会2～深夜～

～土曜日・深夜0時～

「……………」

「……………」

私の言葉(?)に答えるレノン。

「なんでこんなことになってんのおおおおおおおおおお
おお!!!!!!」

私の絶叫。

あの朝の会の後、私たちは土曜日の深夜0時にここに集合と言った
とで話が終わった。そしてそのあと……………」

そんなことなどを私の脳内で回想していると

「霧島うるさい。こんなことばれたら恥ずかしくて俺生きていけな
くなるんだから静かにしてくれ。」

藤野が言った。

「ごめん……………」

私はすぐ反省した。

そんな私たちなど構いなしにレノンは校門に向かっていく。そして
校門を飛び越えた。続いて飯沼校門を飛び越えた。その後に藤野
が飛び越えた。私もその後続いた。でも暎子がなかなか校門を飛
び越えようとしない。

「さつさと来なよ。暎子さん。それとも何?こんなところまで来て
まさかやめようとか言わないよね?」

「っ!!!!!!」

……………」暎子とレノンは相性が悪いのだろうか?前もこんな
ことが5回くらいあった。

暎子は渋々と言った感じで校門を飛び越えた。

そのあと私にしか聞こえない程度のもっとも小さな声で

「レノンなんか……………」

と聞こえた気がした。

図書室へ向かう。静かな廊下には私たちの足音が響いていた。足音以外何も聞こえない廊下。結構な怖がりらしい暎子は私の手を強く握ってくる。その手は小刻みに震えていた……。私は暎子の手を握り返した。暎子はびっくりしたらしく驚いたような表情で私のほうを見た。そして小さな声で

「ありがとう。」

と言った。私は返答の代わりに暎子の手を握ってあげた。

そうこうしているうちに図書室についた。

図書館に皆で入る。レノンがさっき開いた扉を閉めて鍵をかける。鍵をかけたほうが良いだろうと言うレノン。でも鍵なんかかけちゃってもいいんだろうか？何でも様がでやくなるのでは？と私は考えた。暎子もそう思ったらしくレノンが扉を閉めたとき嫌そうな顔をしたのでを見た。でも気付かないふりをしておいた。レノンは儀式をさっさと始めたがっているようだった。

「さっさと始めよう。」

とせかしてくる。

私たちは用意してきたものを全部この図書室の真ん中らへんに置く。そして儀式は始まった。

右側から私・暎子・飯沼・レノン・藤野という順番。

もう「何でも様何でも様どうかこの場におらっしゃってください。おらっしゃいましたら私たちの肩を右側から順に叩いていってくださいませ。」とは言ったのだけど……。

と私が思ったそのとき不意をつくように私のむ右肩が叩かれた。何でも様だ！

そう思った私は真ん中へ行って持参したカッターナイフで指を少し切った。

ちよっと痛いけどこんぐらいなら平気だ。私は自分の願い事を書いた。私がぼんやりしているうちに皆願い事を書き終えたようだ。し

ばらく沈黙。すると突然くすくすと笑い声が聞こえた。何でも様かもしれない。と私は思った。しばらくじっとする。

「遊びにきてくれたの？」

いつの間にか少女が私たちの輪の真ん中に立っていた。

「・・・これが・・・何でも様??」

レノンが言った。

「これがとか酷い言い方しないでよ。傷つくじゃん。」

何でも様らしき女の子が言う。

およそ13歳くらいの可愛い女の子。髪はツインテールで服装は真っ赤なワンピース。そのワンピースの赤の色がちょっと薄気味悪い。「いや。だって全然何でも様って感じじゃないし。」

「その言い方は酷いな」。何でも様っぽくなくても私は確かに何でも様とあなたたちに呼ばれている存在だよ？まあ私の話知ってる人はあんまないっばいけど・・・」

「あつそ。じゃ私の願い事叶えてよさつさと。」

何でも様が自分の想像以上に幼く見えるせいかレノンは強気だ。

「いいよ。叶えてあげる。」

その瞬間レノンの足が消えた。そして私の目の前に転がってきた。

「い・・・嫌あああああああああああああ!!!」

暎子が叫ぶ。

レノンは床に倒れこむ。

男子二人は啞然としてる。

私は現実を受け止められないでいる。

目の前にあるこれは何？レノンの足なわけないよね。

あれ。でもレノン苦しそう。

どうしてだろう。どうして苦しそうにしているんだろう？

暎子の

「愛理夏！愛理夏！」

と呼ぶ声で現実に取り戻される。

私の目の前にはやっぱりレノンの足が転がっている。

ああやっぱりこれは現実なんだ・・・。

そう思いレノンの方へ走っていくがやっぱりすべてが遅かった。もう・・・レノンはいない。そこには潰れた顔とレノンの腹から出ている内臓。腹から出ていた一つの内臓を手に取りその内臓を床に叩きつけその潰れかけの内臓を踏みにじって何でも様が

「レノンの願いはちゃんとうてあげたよ。」
と言った。

「何がだよ。」

と冷静になっいたらしい飯沼が言った。

「何がって??」

何でも様がきよんとする。

「お前はこいつの願いを叶えたと言ったがどんな内容だったんだよ。藍澤の願い。」

飯沼が何でも様に質問する。

「ああ。レノンちゃんの願いの内容が聞きたいの?」

何でも様の問いにくくと頷く飯沼。

「それはねー。・・・無限の命だったの。」

「・・・は?」

まさかの何でも様の答えにポカーンとしてしまった飯沼とそれ以外の私たち。

それにかまわず何でも様は続けた。

「バカだよー。無限の命なんてこんな年になって信じてる人始めてみたよー。さすがの私も無限の命は無理だったから無限の時間って言う意味である意味無限の命かなーって思ってた。多分この人成仏できないからきつとそれこそ無限の命だと思うからきつと喜んでくれてるよ。」

「・・・。。。そんだけ・・・。。。」

私は呟いていた。何でも様の耳にはこの声が届いたらしい。(普通の人なら聞こえないような声だったと思うんだが・・・。。)
「ん?何?」

何でも様がこつちを見た。

「そんだけの理由で人を殺したの?!?!」

「うん。」

何でも様は「それがなにか?」と言いたげな顔をしている。

その顔に私はいらつとした。

「何よその顔?!?!? あんた自分が何したか分かつてんの?!?!? 人を一人殺したんだよ!?!? なのになにその態度!?!? あんた何様のつもり?!?!?」

まくし立てる私が怖いのか何でも様は涙目だ。でも今はそんなこと関係ない。

「何泣きそーになってんのよ!! それ絶対演技でしょ!! 上手なんだね演技が!!」

もう私の言っていることはでたらめだ。そう思ったのに何でも様が

「よく分かったね。」

と言った。

えっ………。本当に演技だったの……。

「凄いねー。これが演技だと分かっちゃうなんて。こんな人私始めて」

あははははははははははははははははははははははと何でも様の笑い声が図書館に響く。

そして突然

「よし。決めた。本当は皆ここで殺しちゃうつもりだったけど愛理夏ちゃんが私のこと楽しませてくれそうだから愛理夏ちゃんとも他の皆とももつと遊びたくなっちゃった だから場所を変えようかなあ」

ここじゃない場所で皆の願いを叶えるよ。そのついでにいっぱい遊んでね」

うゝん。と何でも様が唸っている。このうちに逃げたいのに足はビクともしない。

どうして!?!?!?!?

私がそう思った。そして他の皆も多分そう思った。そこで何でも様が「あつ。ついでだけど逃げようったってそうはいかないからね。私の友達にちよつと手伝ってもらって皆が動けないようにしてあるから。」

と言った。私たちの生き残る可能性が1パーセントくらいかな。と思った。絶望的だ。

しばらくたって何でも様はひらめいたらしい。あつ！と叫んで言った。

「お客様はまず自分の家に招待したほうがいいよね！？よし！私の家に案内してあげる。」

その言葉とともに足が動くようになった。出口へ走っていきこうとしたとき突然頭を殴られた。

結構痛い。多分バットとかだと思う。

最後に見たのは

「ごめんね。すぐ終わるから！」

と言って笑いながら私を見ている何でも様と私に突撃しようとしている本（約10冊）だった。

本に負けてしまった私って……！と思ったとき2度目の衝撃が頭を駆け巡り私の意識はぷつりと途切れた

朝の会2 深夜 (後書き)

ついに犠牲者が一人出ました

こんなグダグダになってしまいすいません！

また次回の投稿が遅くなるかも・・・。

お許してください！！

そして見てくださった方々今回も本当にこんなのに付き合ってください
さってありがとうございます！！

一時間目〜何でも様のお家1〜（前書き）

ちよつと早めの投稿かな？

前回ちよつと犠牲者（無理矢理作った・・・。）が出ましたね。

一時間目く何でも様のお家1く

気がついたら図書室ではなく私たちの高校でもない場所にいた。

「……………ここは??？」

「どこなんだろう? 皆は…………? とりあえずここから出ようかな…………。今私がいるのは職員室の前。」

「うん。出口までどのくらいの距離なんだろう。とりあえず出口を探そう…………。」

「……………見えた。」

しばらく歩くと生徒の靴箱が見えてきた。急いで昇降口へ向かうと咲子がぼーっと立っていた。

私は咲子に合えて嬉しくって咲子の背中をポンと叩いた。

「やつほ。咲子どうしたの?」

無理やり笑顔を作って咲子に声をかけた。

「っ!?!?!?」

咲子が即座に振り返る。その手にはなぜか鉄パイプが握られていた。そして顔に血が付着していた。私は何を言っただけなのか分からずに黙ってしまう。私の顔を見て咲子は

「なーんだ。愛理夏じゃん。やつと起きたんだね。」

と話かけてきた。私は

「咲子どうしたの。顔に血が……………」

私の質問に咲子は

「ああ。ちよつとね。」

と曖昧な答えを返す。

「ちよつとじゃないでしょ。大丈夫?」

私は咲子が心配なのでもう少し聞いてみる。

「うん。大丈夫。ちよつと切っちゃっただけだから……………」

「良かった…………。他の二人は?」

「知らない。私が起きた時にはもういなかった。」

「そうか。じゃあいいや。」

しばらくの沈黙。

お互い何を話たら良いか分からない。

私は

とりあえず暎子の傷から出てくる血を止めなければならない。

と思った。そして

「あ。じゃあちよつとその傷の血を止める何かを持ってくるよ。」

と言った。すると暎子は

「ん？傷って何の話？」

と言った。

「やだなー。とぼけないでよ。その顔についてる傷のことじゃん。」

と言った。すると暎子は

「ああ。これは傷じゃないよ。」

と言った。私は

「え！？でもさつき切ったて言ってたし……。しかも血出てるし。

……。」

すると暎子はふううとため息をついた。

「…………あのさ……………」

「何？」

「…………なんでもない。ごめんね。」

どうしたんだろう。暎子はいつもはこんな曖昧なこと言わないのに……。

もしかして……………。

「その通りだよ。」

「え…………。」

突然暎子が言った言葉のわけが分からなくて私はもう一回聞いてみることにした。

「だからさ。今一瞬考えたでしょ。もしかしたら暎子じゃないかもしれないって…………。」

その言葉が聞こえた瞬間私は走り出した。

なぜだか分からないけどこの人は絶対暎子じゃない。

遠くで偽の暎子が

「行動力があるんだね……。前の子は逃げなかったのに……」

と言った気がした。

たぶん昇降口は開いてないのだろう。

なぜか分からなかったけどそう思った……。

一時間目〜何でも様のお家1〜（後書き）

すいません。

こんなでも見てくれたらうれしいです。

次回もよろしくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3421m/>

何でも様

2010年10月10日06時25分発行